海岸林を造り・育て・守る森林づくり

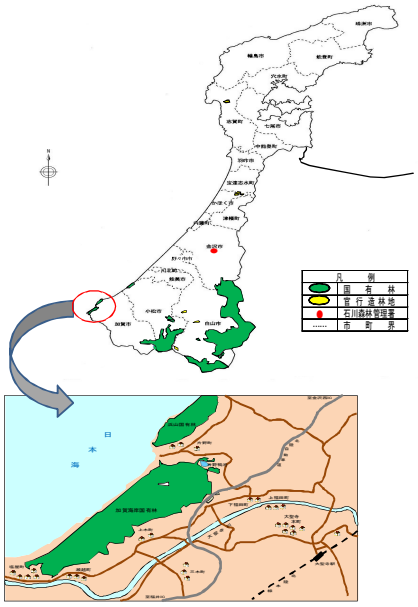
加賀海岸国有林での取組み

1.加賀海岸国有林の概要

加賀海岸国有林は石川県の南西部に位置し、加賀市の海岸線に沿って長さ４Km、幅５００m～１，２００m、面積３３０haの広大な海岸林です（図－１）。

当国有林は、防風保安林に指定され、住宅や田畑を飛砂や潮風から守るとともに、越前加賀海岸国定公園にも指定され、優れた景観は市民の憩いの場となっています。

また、松と砂浜が織り成す景観は、日本の白砂青松100選にも選ばれています。



加賀海岸国有林の所在位置図（図-1）

2.江戸時代の取組み

加賀海岸には、元禄年間（1688～1704年）以前は多少の樹木があり、飛砂や潮風から住宅や田畑を守っていました。その後、樹木の枯れなどにより飛砂の被害が増え、特に風下にあたる上木部落では、１５０戸、３８haあった住宅や田畑のうち、天保１２年（1842年）までに、その半分以上が砂に埋め尽くされました。

このような中、大聖寺藩では、明和３年(1766年）に上木の浜に長さ約１，６２０mの砂防垣を造りクロマツの苗木を植えました。また、天明６年（1786年）には、片野の浜から塩屋の浜までクロマツの苗木を植えるなど、江戸時代の中ごろから本格的な植林が行われました。

このような取組みは、藩のみで行えたのではなく、私財を投じて取り組んだ地元の人々がいたことは言うまでもありません。

3.明治末頃の加賀海岸林

明治43年の加賀海岸国有林

江戸時代の中ごろから約１００年間にわたりつくられた海岸林は、明治４年（1871年）に大聖寺藩がなくなると、海岸林を守る役人がいなくなったことなどにより、明治９年(1876年)からわずか８年の間に、砂嵐等により、場所によっては１００m以上の幅の海岸林が砂に埋もれ、これにつづく田畑も埋もれました。

地元や県は少しでも被害を防ごうとクロマツを植えましたが、毎年秋から冬にかけての砂嵐のため、植えた苗木は砂で埋めつくされました。